

# 大学生のコミュニケーション能力の 育成を図る授業実践

—— タイ王国の小学校での授業参加を通して ——

林 徳治・石井 由理・谷口由美子\*・真下 知子\*\*

Practice for cultivating university students' communication skill  
—Through the case study of collaboration with children in the Kingdom of Thailand—

HAYASHI Tokuji, ISHII Yuri, TANIGUCHI Yumiko\*, MASHIMO Tomoko\*\*  
(Received November 6, 2001)

本稿は、『第3回タイ・マレーシア・シンガポール研修旅行』よりプーケット県(タイ王国南部)における研修プログラム(事前研修を含む)の概要を報告するとともに、小中学校の児童生徒を対象とした本研修旅行参加学生による授業参加について、研修終了後実施したアンケート調査結果から、本研修プログラムの有用性と今後の課題について考察した。

## 1. はじめに

山口大学教育学部では、平成13年8月28日(火)～9月20日(木)の24日間にわたって、『第3回タイ・マレーシア・シンガポール研修旅行』を実施した。

本研修旅行は、原則として、本学教育学部2年生以上が参加資格を有する。

なかでも国際理解教育コースの3年生では「国際交流実習Ⅱ(コース指定・必修科目)」, 同2年生は「異文化体験実習Ⅱ(選択必修科目)」として、授業カリキュラムの一環として位置付けられており、授業シラバスには研修旅行の目的が以下のように示されている。

『マレーシアとシンガポールで、多民族複合社会の実態を体験的に学習する。大学寮や農村ホームステイを通じて、生活の原点から共生のための異文化理解や異文化交流について各自の研究テーマに基づいて体験的に研究する。事前研修や体験報告会を徹底し、原点としての自国文化や自己自身への認識を高め、今後の国際理解教育の基礎固めを行う。』

前回までの研修地は、マレーシアとシンガポールの2カ国であったが、本年度、新たな研修先としてタイ王国が加わった。その経緯として、筆者(林)が、前任校の京都教育大学において平成7～11年の6年間、京都府教育委員会より派遣された内地留学生(全19名、いずれも教職経験15年以上の小中高等学校現職教諭)を対象とした教師教育の取り組みがあった。内地留学生らは6ヶ月間の研修期間中に、授業改善を目的に筆者らが開発した教師訓練プログラムに取り組み、その総括として、タイ王国でのプレゼンテーションを計画・実施した。本プレゼンテーションは、林研究室在籍の大学院生・留学生も含めて、毎年度

\*三田学園高等学校 \*\*平安女学院大学

実施され、国際学会・大学での研修報告や発表、大学や小学校での授業参加など、相手や場所、内容・方法などは多岐にわたる。これらプレゼンテーション指導や教師教育に加えて、国際協力事業団(JICA)専門家としての国際協力を通して得た経験や知見を活かして、本研修旅行と融合させることをめざした。

## 2. 第3回タイ・マレーシア・シンガポール研修旅行の概要

研修先と研修概要を表1に示す。研修プログラム全体の企画・事前準備は中村幸士郎氏(国際理解教育コース主任)を中心に行われ、筆者(石井)が引率指導教官代表として、全旅行工程を引率・指導した。林は、特に、プーケット県(タイ王国南部)での研修プログラムの企画と事前準備を行い、タイ王国での引率・指導を担当した。また、研修支援のために筆者(真下、谷口)がタイ王国での研修旅行に同行した。

表1 研修先と研修概要

研修先	(泊)	研修概要
タイ王国	[1] バンコク (タイ王国首都)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カセサート大学寮滞在</li> <li>・日本大使館表敬訪問</li> <li>・JICA(日本とタイ王国との関係、教育制度など)</li> <li>・ユネスコ表敬訪問</li> <li>・カセサート大学(学生との各種研修交流会)</li> <li>・中学校訪問(生徒との交流会)</li> <li>・市内観光</li> </ul>
	(4泊)	
	[2] プーケット (タイ王国南部)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プーケット地域総合大学(学生との各種研修交流会)</li> <li>・小学校での授業参加</li> <li>・中学校訪問(生徒との交流会)</li> <li>・市内観光</li> </ul>
	(6泊)	
マレーシア	[1] ベナン島	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マレーシアについての各種研修</li> </ul>
	(2泊)	
	[2] クアラルンプール (マレーシア首都)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マラヤ大学寮滞在(大学生との各種研修交流会)</li> <li>・日本大使館表敬訪問</li> <li>・JICA</li> <li>・日本企業</li> <li>・政府新都市プトラジャヤ</li> <li>・通信ハイウェイ</li> </ul>
	(5泊)	
	[3] 中部農村地域	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホームステイ</li> <li>・各種プランテーション</li> <li>・農村の小学校、村人との交流会</li> </ul>
	(2泊)	
	[4] マラッカ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マラッカ市内見学</li> </ul>
シンガポール	[1] シンガポール (シンガポール首都)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シンガポールについての各種研修</li> <li>・中学校訪問</li> <li>・熱帯鳥類園見学など</li> </ul>
	(2泊)	
その他		<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前研修</li> <li>・事後研修</li> <li>・小中学校での報告会・報告書作成など</li> </ul>

### 3. タイ王国における研修プログラム

#### 3-1. 事前研修

各研修地のうち、タイ王国およびプーケット県(タイ王国南部)に関する事前学習に加えて、授業参加の計画・実施に向けた事前研修を実施した。概要を以下に示す。

##### (1) タイ王国からの留学生と一緒にタイ王国を学ぶ

本学のタイ人留学生(カセサート大学修士課程修了)から直接、タイ王国の文化・習慣、およびタイ語の日常会話について学ぶ機会を設けた(図1～3参照)。本留学生はすでに広島大学で日本語を学んでおり、電子黒板や印刷教材などを利用して指導した。

##### (2) タイ王国公立小中学校における授業参加の計画

タイ王国の文化・習慣・教育制度などに関する学習に加えて、過去7年間における林研究室の研修旅行に参加した現職教員や学生らが実施したプレゼンテーション事例について、記録ビデオを利用して紹介した。ここでは、授業のテーマ設定・アウトライン(ストーリー)作成・教材作成・リハーサルの実施と評価など、計画や事前準備の重要性を学ばせることに配慮した。また今回は、グループ単位で取り組む旨を通知した。

さらに、次の4点を林研究室のホームページに掲載した。

(参照URL：<http://www.hayashitokuji.com/flame.html>)

##### 1. ガイダンス

タイ王国の文化・習慣、教育制度、プーケット県、渡航準備について渡航経験者からの諸注意(特に、タブーとされること)。また、『富山大学海外ボランティア体験記』、『Study in Thailand』、『JICA任国情報』など、関連するホームページアドレスを紹介した。

##### 2. タイ研修旅行参加の学生の皆さんへのアドバイス集

上述のプレゼンテーション経験者からの助言をまとめ、現地ガイドからのコメントも合わせて掲載した。e-mailによる意見交換ができるよう工夫した。構成を以下に示す。

- ①氏名と所属、e-mailアドレス
- ②私が行った授業・プレゼンテーションのアウトライン
  - 1)テーマ、2)対象、3)内容、4)方法(教材・教具を含む)
- ③プレゼンテーションのために準備しておく役立つこと
- ④ワンポイントアドバイス(私の失敗から…)

##### 3. 新タイ語入門

日常会話に必要な単語を抽出しまとめた。

(例：「こんにちは」⇔男性：「サワディー カップ」、女性：「サワディー カー」)

##### 4. プーケット最新情報

筆者(林)は事前にプーケット県へ渡航し、訪問先の教育関係者や現地スタッフらと研修準備を行うとともに、最新情報(画像)をWeb上で学生に提供した。



図1 留学生



図2 研修旅行参加学生



図3 タイ王国の紙幣

### 3-2. プーケット県における研修プログラム

プーケット県での研修先・研修内容について主なものを抜粋して表2に示す。

表2 プーケット県における研修プログラム(タイムスケジュール)

日時		研修先と研修概要	
初日	9/1 (土)	9:00~12:30	BangkokからPhuketへ移動
			[Lunch] Mr. Chokdee(元Rajabhat Institute Phuket教官)宅にて
		14:30	[Check in] Coconut Village Patong
		15:00~19:00	Phuket島内観光; Chalong寺院, Patong・Karon・Kata・Rawaiビーチ, Phromthep岬の夕日
			[Dinner] Phuket Townのタイ料理店にて
		23:00	点呼
第2日	9/2 (日)	終日	グループごとに自由行動
第3日	9/3 (月)	8:50	[Check out] Coconut Village Patong
		9:30	[Check in] Phuket Garden Hotel
		10:00~12:30	Rajabhat Institute Phuket(プーケット地域総合大学)訪問 大学長および教官とのミーティング 学部生との交流研修会(大学構内・施設の見学を含む)
			[Lunch] Rajabhat Institute Phuket近郊のタイ料理店にて 歓迎食事会(山口大学教育学部主催)
		14:00~	Rajabhat Institute Phuketの学生と共に Phuket Town内で自由行動
		22:00	点呼
第4日	9/4 (火)	9:00~12:00	Anuban Phuket小学校訪問 ★グループ別に授業参加
			[Lunch] Metropoleにてピュッフエスタイルで
		14:00~15:00	Phuket 中学校訪問 ★交流授業参加
		16:00~	グループごとに自由行動(夕食含む)
		20:30~22:30	伝統的タイ式マッサージ体験
第5日	9/5 (水)	9:30	Phuket Garden Hotel 近郊の中国寺院参拝
		11:00~	グループごとに自由行動
			[Dinner] ナイトマーケット・屋台にて
		22:00	点呼
第6日	9/6 (木)	7:30~	Phang-nga島観光
		10:00~	Phuket島内観光; プランテーション(ゴム園, 果実園), 自然公園など
			[Lunch] タイ料理店で
		13:00~	グループごとに自由行動
		18:00~	[Dinner] Mr. Chokdee宅にて(研修活動報告・反省会)
		22:00	点呼
最終日	9/7 (金)	10:00	[Check out] Phuket Garden Hotel
		12:30	Penangへ出発

### 3-3. タイ王国プーケット県での児童を対象とした授業参加

タイ王国での研修プログラムは、協調性の育成をめざし、グループ活動を基本とした。参加学生24名は、5つのグループ(3年生で構成:2班,2年生で構成:3班)で編成した。(以下,3年生の2班を各々3A・3B,2年生の3班を各々2A・2B・2Cと称する。)

授業参加は,9月4日(火)に公立アヌバン小学校プーケット校(:Anuban Phuket Elementary School),公立プーケット中学校(:Phuket Wittayalai)において実施した。授業の計画(教材作成・リハーサルなどを含む)―実施―評価の一連の活動にグループ単位で取り組んだ。

本稿では,アヌバン小学校プーケット校第6学年の児童を対象とした授業参加について,授業の概要(事前準備を含む)を,事後アンケートでの報告より,グループ別に紹介する。

#### (1)「ゲーム:フルーツバスケット」

1. 実施グループ:3B(国際理解教育コース3年男子1名・同女子5名・計6名)
2. 対象・時間:第6学年6組・30分間
3. 目的:タイ王国の身近な果物を用い,日本の子ども達がよく遊ぶゲームをタイ王国の児童に知ってもらい共に楽しむことで相互コミュニケーションを図る。
4. 内容・方法(活動風景を図4・5に示す。)
  - ①タイの身近な果物を4種選び(ドリアン,オレンジ,バナナ,スイカ),全員何か一種の果物役になる。
  - ②机を移動させて教室中央に空間を設け,円状に椅子を並べ(配置図を黒板に図示),児童を着席させる。
  - ③ゲームのルール説明。タイ文字で表記したカードを同時に提示しながら,全てタイ語で説明する。逐一,わかったかどうかを確認する。
  - ④フルーツカードの配布。(4種の果物の絵を描いたカードを首から下げて自分が何の果物役かを示す。)
  - ⑤4種の果物の学習。(果物の名前を日本名とタイ名で,発音などをみんなで学習する。)
  - ⑥ゲームの実施。
5. 教材・教具:
  - ①黒板と文字カード(タイ文字で表記)
  - ②果物のフリップ4種類(果物のイラストと名称,名称はタイ文字で表記し,マスキングして提示する。)
  - ③フルーツカード(全員分を画用紙に描画・着彩,首から下げるための紐付き。)
6. 事前準備:教具は全て日本で作成・準備した。事前に,授業の流れを考えて必要となるタイ語を留学生に教わった。その際,タイ文字での表記方法まで教わったので,それを真似てカードに書き,現地ガイドに確認してもらったうえで,授業で提示した。口頭による説明だけでなく,視覚に訴える物を使用したことが授業を円滑に進めるために大変有用だった。また,事前研修で,挨拶などの日常会話や現地の風習を教わったことが役に立った。



図4 ゲームをする児童

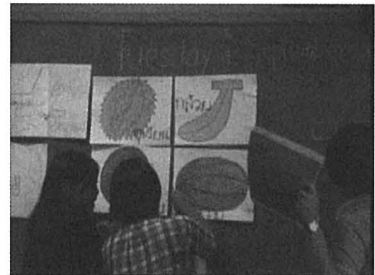


図5 フリップで説明

## (2) 「Let's play SUGOROKU game! (『双六』タイから日本へ行こう!!)」

1. 実施グループ：3 A (国際理解教育コース3年男子1名・同女子4名・計5名)
2. 対象・時間：第6学年5組・30分間
3. 目的：日本の遊びを体験する。
4. 内容・方法 (活動風景を図6・7に示す。)

①タイから日本へ行く道のりを双六で表し、止まるポイントに日本文化の紹介を設ける。

②双六の最初と最後の部分は、通常のものと同様にマスを区切る。絵または写真を貼っておき、それをタイ語ではどのように言うのかを質問し、次に日本語ではどのように言うかを教えて、実際に児童に質問する。

③双六の中間部分は、四季ルートと遊びルートに分ける。直前のマスで出たサイコロ目によってどちらのルートに進めるかを決定する。(1,3,5の場合は四季ルート、2,4,6の場合は遊びルート)

④四季ルートと遊びルートでは、必ず全てのポイントに止まることとし、各ポイントに課題を設ける。課題ができたなら合格とし次ポイントへ進む権利を与える。

⑤四季ルートでは、春・夏・秋・冬のイベントや関連するものを提示する。課題もそれに関連したものにする。(歌の紹介、折り紙で作ったものをプレゼントする。)遊びルートでは、日本の伝統的な玩具(お手玉・剣玉)を提示し、そのポイントで止まった班の児童に実際に体験させる。

### 5. 教材・教具

- ①手づくりの双六盤(模造紙を貼り合わせた大型、タイと日本の地図を基本に表現)
  - ②子どもの形のコマと大型サイコロ(現地組み立て)
  - ③絵葉書、写真、剣玉、折り紙、お手玉、ワイヤレスマイク(教室に設置済み)
6. 事前準備：プーケット地域総合大学の学生や現地ガイドから、タイ語の褒めことばや挨拶ことばなどを教わり、一緒に発音練習をしたことが役に立った。  
また日常、できるだけタイ語を使うようにしてタイ語を練習したことが有用だった。

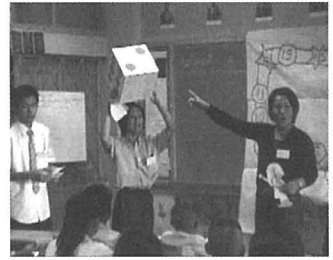


図6 サイコロ



図7 剣玉をする児童

## (3) 「日本の遊びとドラえもん」

1. 実施グループ：2 A (国際理解教育コース2年男子2名・同女子3名・計4名)
2. 対象・時間：第6学年4組・20分間
3. 目的：日本の伝統的な遊びを通して、日本の文化や日本らしさに触れてもらう。
4. 内容・方法 (活動風景を図8・9に示す。)

①最初に、山口県とはどのような所なのかを紹介する。

②日本の昔ながら遊び(紙相撲、独楽、剣玉)を紹介し、児童に実際に体験させる。

③学生のギター生伴奏に合わせてドラえもんの主題歌を日



図8 紙相撲をする児童

本語で歌う。

5. 教材・教具

- ①文字カード(紙相撲・独楽・剣玉をタイ語に訳し、タイ文字で表記)
- ②チャート(模造紙、山口県に関連した内容)
- ③身長120cmの紙製のドラえもん(現地で作成)
- ④手作りの紙相撲、独楽、剣玉

6. 事前準備: 「新タイ語入門」と事前研修においてビデオ

から現地の様子を見られたこと、一般的なタイ王国の習慣(やってはいけないこと)を学んだことが有用だった。



図9 ドラえもん

(4) 「DANCE DANCE REVOLUTION」

1. 実施グループ: 2 B (国際理解教育コース 2年男子 2名・同女子 2名・計 4名)
2. 対象・時間: 第6学年 4組・30分間(2 Aの授業参加に連続して実施)
3. 目的: 日本の伝統的な踊りである「炭鉱節」を踊ることで児童と文化的交流を深める。みんなで「オクラホ・ミキサー」を踊り、和を深める。

4. 内容・方法(活動風景を図10・11に示す。)

- ①「炭鉱節」にちなみ、日本の伝統的な衣装として浴衣や甚平を着て登場する。事前に調べておいたタイ語で挨拶や説明のあと、学生だけで「炭鉱節」を披露。
- ②男子には新聞紙で折ったかぶとを、女子には折り紙と安全ピンで作った髪飾りをプレゼントする。
- ③机・椅子を移動させて教室中央に空間を設け、フォークダンス「オクラホマ・ミキサー」の踊り方の手本を見せながら、一緒に踊る。

5. 教材・教具:

- ①「炭鉱節」の解説チャート(模造紙に日本語で表記)
- ②フォークダンスの隊形図(模造紙に作図)
- ③「炭鉱節」「オクラホマ・ミキサー」のBGMカセットテープとテープ・デッキ、団扇

6. 事前準備: 現地の人から、直接、タイ語を学んだことが最も有用だった。



図10 自己紹介



図11 フォークダンス

(5) 「折り紙: つる」

1. 実施グループ: 2 C (国際理解教育コース 2年男子 3名、生活健康科 2年女子 1名・計 4名)
2. 対象・時間: 第6学年 6組・20分間  
(3 Bの授業参加に連続して実施)

3. 目的: 日本の代表的な文化の一つである「折り紙」に少しでも触れてもらうことで国際理解を深めると同時に、この交流でタイの子ども達に日本の存在を知ってもらう。

4. 内容・方法(活動風景を図12・13に示す。)



図12 つるを折る(1)

- ①最初に日本人学生の代表者が、クラス全員の前で挨拶をし、自分たちの目的を説明する。
  - ②クラスの児童を4つにグループ分けをして、グループごとに個別指導で折り紙のつるを折る。(完成品はプレゼントする。)
5. 教材・教具：折り紙
6. 事前準備：「新タイ語入門」は、色々な場面で有用だったので引き続き使ってほしい。



図13 つるを折る(2)

### 3-4. 学生による授業参加の評価

研修旅行終了後に、授業参加をした学生グループを対象に質問紙によるアンケート(自由記述)調査を実施した。質問項目を図14に示す。

本アンケート調査は、授業参加の有用性や今後の課題を明らかにし、実施された研修プログラムの改善を図ることを目的とした。

以下アンケート調査結果より、目的意識と満足度、および学生による自己評価に関して、主な記述を抽出してグループ別に報告する。結果を表3に示す。

<p style="text-align: center;">タイ王国研修旅行における授業参加(プレゼンテーション)に関するアンケート</p> <p>[1] 授業(プレゼンテーション)のアウトライン</p> <p style="padding-left: 20px;">①タイトル・テーマ, ②対象, ③目的, ④内容, ⑤方法(教材・教具を含む)</p> <p>[2] 事前研修・準備</p> <p style="padding-left: 20px;">①授業参加に対して、一番期待していたことはどのようなことですか。【目的意識】</p> <p style="padding-left: 20px;">②実際に授業参加を実施して、期待していたことはどの程度満たされましたか。 該当する箇所に○を付けて下さい。【満足度】 (A: 80~100% B: 70%前後 C: 60%以下)</p> <p style="padding-left: 20px;">③Aとされたグループは期待が満たされた要因を、【要因/肯定】 BまたはCとされたグループは期待が満たされなかった要因を、【要因/否定】 記述して下さい。</p> <p style="padding-left: 20px;">④事前研修のなかで、最も役に立ったことはどのようなことですか。【事前・有用性】</p> <p style="padding-left: 20px;">⑤授業参加の準備(企画・教材制作等)で最も苦労したことはどのようなことですか。</p> <p>[3] 授業参加の自己評価</p> <p style="padding-left: 20px;">①自分たちの授業を客観的に評価してみて、どの程度成功したといえますか。 該当する箇所に○を付けてください。【自己評価】 (A: 80~100% B: 70%前後 C: 60%以下)</p> <p style="padding-left: 20px;">②Aと評価したグループは成功に導いた要因を、【要因/肯定】 BまたはCと評価したグループは失敗に至った要因を、【要因/否定】 具体的に記述して下さい。</p> <p>[4] 研修プログラムの有用性と改善点</p> <p style="padding-left: 20px;">タイ王国における研修旅行全日程の中で最も有益だったのはどのようなことですか。 また、今後改善が必要な点は何でしょうか。</p> <p>[5] 引率指導の改善点</p> <p style="padding-left: 20px;">引率した教師団はいかがでしたでしょうか。改善が必要な点は何でしょうか。</p>
---

図14 アンケート調査の質問項目



表3 アンケート調査の結果(目的意識と満足度、授業参加の自己評価のみ抽出)

目的意識	班名	主 な 記 述	
	3 A	児童が積極的に授業に参加し、楽しんでくれること	
	3 B	授業の成功、児童の反応(楽しそうな笑顔、一緒に遊ぶ)	
	2 A	児童と一緒に盛り上がることで、コミュニケーションが成り立つこと	
	2 B	日本の文化を知ってもらうこと、一緒に踊って楽しんでもらうこと	
	2 C	タイの小学生との交流	

満足度	班名		要因としての主な記述
	3 A	80%~100%満足	(肯定): 児童がすごろくに興味をもってくれた。
	3 B	80%~100%満足	(肯定): ゲーム的要素を多く取り入れたことにより、授業をする側も受ける側も共に楽しんで授業に取り組めた。 (肯定): 拙いタイ語で行ったルール説明の際、自然と児童からのサポートがあり、全員がルールを確実に、理解することができた。
	2 A	80%~100%満足	(肯定): ことばは伝わらないけれど、表情で「ヤッター」「残念」「もう1回」などコミュニケーションが成り立った。 (肯定): 発表後も多くの児童と交流できた。
	2 B	80%~100%満足	(肯定): 自分たちの踊りを真剣に、楽しそうに見てくれた。
	2 C	80%~100%満足	(肯定): 想像以上に児童が積極的に取り組んでくれた。

自己評価	班名		要因としての主な記述
	3 A	70%前後成功	(肯定): なるべくタイ語を使って授業を進めたこと。 (否定): 全員の児童が同じことを体験することができなかった。
	3 B	80%~100%成功	(肯定): 事前準備の充実(教材作成や準備、メンバーとの打合せとチームワーク)。 (肯定): 説明時に話しことばだけでなく、目で見てわかるものも準備したこと。 (肯定): 現地ガイドや留学生に協力してもらったこと。 (発音練習やタイ文字の書き方など)
	2 A	70%前後成功	(否定): 練習不足のため、まとまりに欠けた。 (否定): 剣玉・独楽・紙相撲の数が不足。
	2 B	80%~100%成功	(肯定): 児童にタイ語による説明を理解させることができた。 (肯定): みんな楽しめた。
	2 C	70%前後成功	(肯定): グループに分けて個別指導をしたため、一人ひとりが折れているかを確認しながら進められた。 (否定): 準備不十分のため、満足のいく授業ができなかった。

#### 4. まとめ

タイ王国プーケット県での研修プログラムは、異文化交流の実体験を通して、国際意識と自己認識の強化を図ることをねらいとした。

授業参加は、学生たちの主体的な活動によるもので、メインテーマ「日本の文化をタイ王国の児童・生徒に紹介する」のみ筆者(林)が設定した。メインテーマに基づき、学生たちが「日本の文化として何を伝えるのか」、「なぜ・何(誰)のために伝えるのか」を明確にしたうえで、「どのような方法で伝えるのか」という情報の表現・伝達(プレゼンテーショ

ン)技術を、授業参加を通して習得・向上させることで、コミュニケーション能力の育成を図ることをねらいとした。

事前研修では、授業の計画に向けて、内地留学生(現職教員)のプレゼンテーション事例を数点抽出し、録画ビデオを使って学生に紹介した。ここでは、「教師が何を・なぜ・どのように伝えているのか」をビデオ映像から学生が読みとり・推察することによって円滑なコミュニケーションを図るための効果的な言語、非言語、教育メディア利用に関する新規スキーマの獲得を意図した。

実際に学生が行った授業は、いずれも「児童参加型」で、タイ王国の児童が日本の伝統玩具に実際に触れることや共にゲームやフォークダンスをする、すなわち、共有された実体験を通して、コミュニケーションの成立や深化を図ることを重視していた。

ところが、めざす方向を同じくしても、児童への「働きかけ」に大きな違いが見られた。これは、教育実習経験の有無に起因すると考えられる。小学校教員を志す学生(教育実習経験有)は、「国や母語の違いはあっても対象となる児童の年齢は同じであり、如何に児童をひきつけるかに関してとても勉強になった。」とアンケート調査で述べている。「準備不足・練習不足」と述べた学生の多くは、教育実習経験がなく、どのように働きかければ、児童からどのような反応をひきだすことができるかという、期待する反応(言動・行動)を得るための方略を考える段階まで至っていなかった。これは、今後の事前研修において、より重点的に取り組むべき課題を示唆するものであると考える。

他に、学生から児童への「働きかけ(指示・説明)」に関して注目すべき点は、①タイ語による話しことば、②視覚に訴える表現伝達の工夫の2点である。

①については、授業参加での必要性を予想し留学生の協力を得て日本で学んだグループもあった。しかし、このグループも含め全ての学生が、現地ガイドや交流先のプーケット地域総合大学の学生たちから直接、タイ語(タイ文字表記を含む)を学んだ。特に、現地ガイドには、深夜まで会話練習に協力してもらった。言語は、その成立や熟成に個々の文化的・歴史的背景があり、単語から単語へ、文節から文節への直線的な変換が困難な場合もある。そして、論理的思考を好む場合とイメージ的思考を好む場合などでは、使用する単語の種類や組み立て方などに違いが生まれる。言語コミュニケーションのチャンネルの違いは、それらの背景にある文化の違いであるともいえる。ゆえに、外国人と直接コミュニケーションする機会をもつということは、異なった言語に触れると同時に、異なった文化に触れることでもある。

また、②については、タイ文字表記によるカード、日本の浴衣や甚平などの服装の工夫、地図・果物・ドラえもんなどのイラストなど、聞いて理解することよりも、見て(読んで)理解することを目的に工夫された様々な教材を活用していた。

アンケート調査結果より、有用な研修プログラムとして、授業参加とプーケット地域総合大学の学生との交流が高く評価された。プーケット地域総合大学は、教員養成系大学であり、山口大学と姉妹校であるカセサート大学と比べて、学部数・人数・敷地面積など何れも小規模である。加えて今回の交流は、約半日間、グループ別に自由な形式で交流できるよう設定したことが、充実した交流成果を生んだと推察できる。

さらに、引率・指導に際しては、学生の「learning by doing」を重視して支援に徹することを心がけたが、そのためには、充実したヒューマン・ネットワークと綿密な事前打合せが不可欠であり、訪問先や現地スタッフの支援・協力があつたことを強調したい。Y

ES・NOをはっきりさせて、物事の処理に関しては全て自らの責任で行うという、いわゆる個人主義の観点からみれば、日本人の曖昧な態度・集団的行動は幼稚に思われるかもしれない。だが、自分たちの思うままの欲求を貫き通そうとする思潮よりも、集団としての和を尊び他人への思いやりを重視する思潮を日本人はもっていると筆者は考える。古代から日本はあらゆる文化を受け入れ、日本風にアレンジして取り込んできた。その一つひとつが大いなる文化の宝として存在している。その文化の宝を、国際理解をすすめる栄養源にするためにも、相手の文化や考え方を理解し、尊重できる人間関係(ヒューマン・ネットワーク)づくりを目指したいと考えている。

最後に、本研修旅行の実施にあたりご協力を頂いた本学教授の金田道和氏に感謝の意を表す。